

# すみだ川

永井荷風

青空文庫



俳諧師 松風庵蘿月は今戸で常磐津の師匠をしてゐる実の妹をば今年は盂蘭盆にもたずねずにしまったので毎日その事のみ気にしている。しかし日盛りの暑さにはさすがに家を出かねて夕方になるのを待つ。夕方になると竹垣に朝顔のからんだ勝手口で、行水をつかつた後そのまま真裸体で晩酌を傾けやつとの事膳を離れると、夏の黄昏も家々で焚く蚊遣の烟と共にいつか夜となり、盆栽を並べた窓の外の往来には簾越しに下駄の音 職人の鼻唄人の話声がにぎやかに聞え出す。蘿月は女房のお滝に注意されてすぐにも今戸へ行くつもりで格子戸を出るのであるが、その辺の涼台から声をかけられるがまま腰を下すと、一杯機嫌の話 好に、毎晩きまって埒もなく話し込んでしまふのであつた。

朝夕がいくらか涼しく楽になつたかと思つと共に大変日が短くなつて来た。朝顔の花が日ごとに小さくなり、西日が燃える焔のように狭い家中へ差込んで来る時分になると鳴きしきる蟬の音が一際耳立って急しく聞える。八月もいつか半過ぎてしまつたのであ

る。家の後の玉蜀黍の畠に吹き渡る風の響が夜なぞは折々雨かと誤られた。蘿月は若い時分したい放題身を持崩した道楽の名残とて時候の変目といえは今だに骨の節々が痛むので、いつも人より先に秋の立つのを知るのである。秋になつたと思うと唯わけもなく気がせわしくなる。

蘿月は俄に狼狽え出し、八日頃の夕月がまだ真白く夕焼の空にかかつている頃から小梅瓦町の住居を後にテクテク今戸をさして歩いて行つた。

堀割づたいに曳舟通から直ぐさま左へまがると、土地のものでなければ行先に分らないほど迂回した小径が三囲稲荷の横手を巡つて土手へと通じている。小径に沿うては田圃を埋立てた空地に、新しい貸長屋がまだ空家のままに立並んだ処もある。広々した構えの外には大きな庭石を据並べた植木屋もあれば、いかにも田舎らしい茅葺の人家のまばらに立ちつづいて見える処もある。それらの家の竹垣の間からは夕月に、行水をつかつている女の姿の見える事もあつた。蘿月宗匠はいくら年をとつても昔の氣質は変わらないので見て見ぬように窃と立止るが、大概はぞつとしない女房ばかりなので、落胆したようにそのまま歩調を早める。そして売地や貸家の札を見て過る度々、何ともつかずその胸算用をしながら自分も懐手で大儲がして見たいと思う。しかし

また田圃うちみずたづたいに歩いて行く中水田なみづたのところどこに蓮はすの花の見事に咲き乱れたさまを眺め青々した稲の葉に夕風のそよぐ響をきけば、さすがは宗匠そうしやうだけに、銭勘定ぜにかんじようの事よりも記憶に散在さんざんしている古人の句をば実に巧うまいものだと思返おもいかえすのであつた。

土手あがへ上つた時には葉桜のかけは早はや小暗おくらく水を隔てた人家には灯ひが見えた。吹きはら

う河風かわかぜに桜の病葉わくらばがはらはら散る。蘿月らげつは休まず歩きつづけた暑さにほつと息をつき、

ひろげた胸をば扇子せんすであおいだが、まだ店をしまわずにいる休茶屋やすみぢややを見付けて慌忙あわてて立

寄り、「おかみさん、冷ひやで一杯。」と腰を下おろした。正面まづちやまに待乳山すみだがわを見渡す隅田川すみだがわには

夕風を孕はらんだ帆かけ船しきが頻りに動いて行く。水の面おもての黄昏たそがれるにつれて鷗かもめの羽の色が際立きわた

って白く見える。宗匠はこの景色を見ると時候はちがうけれど酒なくて何の己おのれが桜かな

と急に一杯傾けたくなつたのである。

休茶屋やすみぢやの女房にようぼが縁ふちの厚い底の上つたコップについて出す冷酒ひやざけを、蘿月らげつはぐいと飲干のみほ

してそのまま竹屋たけやの渡船わたしがねに乗つた。丁度河の中ほどへ来た頃から舟のゆれるにつれて

冷酒ひやざけがおいおいにきいて来る。葉桜の上に輝きそめた夕月の光がいかに涼しい。滑なめらかな満

潮の水は「お前どこ行く」と流行唄はやりうたにもあるようにいかにも投遣なげやつた風ふうに心持よく流れ

ている。宗匠は目をつぶつて独ひとりで鼻唄はなうたをうたつた。

向河岸へつくと急に思出して近所の菓子屋を探して土産を買ひ、今戸橋を渡つて真直な道をば自分ばかりは足許のたしかなつもりで、実は大分ふらふらしながら歩いて行つた。

そこ此処に二、三軒今戸焼を売る店にわずかな特徴を見るばかり、何処の場末にもよくあるような低い人家つづきの横町である。人家の軒下や路地口には話しながら涼んでいる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に際立つて白く見えながら、あたりは一体にひっそりして何処かで犬の吠える声と赤児のなく声が聞える。天の川の澄渡つた空に繁つた木立を聳かしている今戸八幡の前まで来ると、蘿月は間もなく並んだ軒燈の間に常磐津文字豊と勘亭流で書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往來には人が二、三人も立止つて内なる稽古の浄瑠璃を聞いていた。

折々恐しい音して鼠の走る天井からホヤの曇つた六分心のランプがところどころ宝丹の広告や『都新聞』の新年附録の美人画などで破れ目をかくした襖を始め、餡色に古びた箆笥、雨漏のあとのある古びた壁など、八畳の座敷一体をいかにも薄暗く照している。古ぼけた葭戸を立てた縁側の外には小庭があるのやらないのやら分らぬほどな

闇の中に軒の風鈴が淋しく鳴り虫が静に鳴いている。師匠のお豊は縁日ものの植木鉢を並べ、不動尊の掛物をかけた床の間を後にしてべったり坐った膝の上に三味線をかかえ、檜の撥で時々前髪のあたりをかきながら、掛声をかけては弾くと、稽古本を広げた桐の小机を中にして此方には三十前後の商人らしい男が中音で、「そりや何をいはしやんす、今さら兄よ妹といふにいはれぬ恋中は……。」と「小稲半兵衛」の道行を語る。

蘿月は稽古のすむまで縁近くに坐つて、扇子をぱちくりさせながら、まだ冷酒のすつかり醒めきらぬ処から、時々是我知らず口の中で稽古の男と一しよに唄つたが、時々は目をつぶつて遠慮なく嘔をした後、身体を軽く左右にゆすりながらお豊の顔をば何の気もなく眺めた。お豊はもう四十以上であろう。薄暗い釣ランプの光が痩せこけた小作りの身体をばなお更に老けて見せるので、ふいとこれが昔は立派な質屋の可愛らしい箱入娘だったのかと思うと、蘿月は悲しいとか淋しいとかそういう現実の感慨を通過して、唯だ唯だ不思議な気がしてならない。その頃は自分もやはり若くて美しく、女にすかれて、道楽して、とうとう実家を七生まで勤当されてしまったが、今になってはその頃の事はどうしても事実ではなくて夢としか思われない。算盤で乃公の頭をなぐつた親爺に

しろ、泣いて意見をした白鼠しろねずみの番頭にしろ、暖簾のれんを分けてもらったお豊の亭主にしろ、そういう人たちは怒ったり笑ったり泣いたり喜んだりして、汗をたらして飽あきずによく働いていたものだが、一人々々皆死んでしまった今日きょうとなつて見れば、あの人たちはこの世の中に生れて来ても来なくてもつまる処は同じようなものだった。まだしも自分とお豊の生きている間は、あの人たちは兩人ふたりの記憶うちの中に残されているものの、やがて自分たちも死んでしまえばいよいよ何も彼も煙かになつて跡あと方もなく消え失うせてしまうのだ……。

「兄にいさん、実は二、三日中うちわたりに私の方からお邪魔あがに上ろうと思つていたんだよ。」とお豊が突然話はなしだした。

稽古きこの男は「小稲半兵衛こいなはんべえ」をさらつた後のち同じような「お妻八郎兵衛つまはちろうべえ」の語かたり出しを二、三度繰返くりかえして帰つて行つたのである。蘿月もつとは尤もつともらしく坐すわり直なおして扇子ひぎで膝たを叩たたいた。

「実はね。」とお豊は同じ言葉ことばを繰返くりかえして、「駒込こまごめのお寺が市区改正で取払いになるんだとき。それでね、死んだお父とつつアンのお墓やなかを谷中そめいか染井どか何処どこかへ移うつさなくつちやならないんだってね、四、五日前にお寺からお使つかが来たから、どうしたものかと、その相談さうだんに行いこうと思つてたのさ。」

「なるほど。」と蘿月は領付うなずいて、「そういう事なら打捨うちちやつても置きまい。もう何年になるかな、親爺おやじが死んでから……。」

首を傾かしげて考えたが、お豊の方は着々話しを進めて染井の墓地じだいの地代ひとつぼが一坪いっぺいいくら、寺への心付けがどうのこうのと、それについては女の身よりも男の蘿月に万事を引受けて取計とけいらつてもらいたいというのであつた。

蘿月はもと小石川表町こいしかわおもてまちの相模屋さがみやという質屋あとりむすこの後取息子あとりむすこであつたが勘当すえの未若すえ隠居いんこの身となつた。頑固な父が世を去つてからは妹お豊を妻にした店の番頭ばんとうが正直に相模屋さがみやの商売をつづけていた。ところが御維新ごいっしんこの方時勢かたの変遷へんせんで次第に家運けうんの傾かたいて来た折も折火事せきにあつて質屋あとりむすこはそれなり潰つぶれてしまつた。で、風流ふうりゆう三昧さんまいの蘿月はやむをえず俳諧はいかいで世を渡わるようになり、お豊はその後亭主ごていしゅに死別しべつれた不幸ふこうつづきに昔名むかしなを取つた遊芸ゆうげいを幸さいい常磐津ときわづの師匠ししやうで生計くらしを立てるようになった。お豊には今年十八になる男の子こが一人ある。零落れいらくした女親おんなおやがこの世の楽しみというのは全くこの一人息子ちゆうきこ長吉ちやうきちの出世しゅっせを見ようという事ばかりで、商人しやうじんはいつ失敗しぱいするか分らないという経験けいけんから、お豊は三度の飯いひを二度にしても、行く行くはわが児こを大学だいがく校がうに入れて立派りつぱな月給げつきん取りにせねばならぬと思つている。

蘿月宗匠は冷えた茶を飲干しながら、「長吉はどうしました。」

するとお豊はもう得意らしく、「学校は今夏休みですがね、遊ばしといちゃいけないと思つて本郷まで夜学にやります。」

「じゃ帰りは晚いね。」

「ええ。いつでも十時過ぎますよ。電車はありますがね、随分遠路ですからね。」

「吾輩とは違つて今時の若いものは感心だね。」宗匠は言葉を切つて、「中学校だつね、乃公は子供を持つた事がねえから当節の学校の事はちつとも分らない。大学校まで行くにやまだよほどかかるのかい。」

「来年卒業してから試験を受けるんでさアね。大学校へ行く前に、もう一ツ……大きな学校があるんです。」お豊は何も彼も一口に説明してやりたいと心ばかりは急つても、やはり時勢に疎い女の事で忽ちいい淀んでしまった。

「たいした経費だらうね。」

「ええそれア、大抵じやありませんよ。何しろ、あなた、月謝ばかりが毎月一円、本代だつて試験の度々に二、三円じやきませんしね、それに夏冬ともに洋服を着るんでしよ、靴だつて年に二足は穿いてしましますよ。」

お豊は調子づいて苦心のほどを一倍強く見せようためか声に力を入れて話したが、蘿月はその時、それほどにまで無理をするなら、何も大学校へ入れなくても、長吉にはもつと身分相応な立身の途みちがありそうなものだという気がした。しかし口へ出していうほどの事でもないで、何か話題の変化をと望む矢先やさきへ、自然に思い出されたのは長告が子供の時の遊び友達でお糸いとといった煎餅屋せんぺいの娘の事である。蘿月はその頃お豊の家を訪ねた時にはきまつて甥おいの長吉とお糸をつれては奥山おくやまや佐竹さたけツ原つばらの見世物みせものを見に行ったのだ。

「長吉が十八じや、あの娘こはもう立派な姉ねえさんだろう。やはり稽古きこに来るかい。」

「家うちへは来ませんがね、この先の杵屋きねやさんにや毎日通かよつてますよ。もう直じきよしちよう 葭町あしちようへ出るんだっていいますがね……。」とお豊は何か考えるらしく語ことばを切きつた。

「葭町へ出るのか。そいつア豪儀ごうぎだ。子供の時からちよいと口のききようのませた、好いい娘こだったよ。今夜にでも遊びあそびに来りやアいいに。ねえ、お豊。」と宗匠は急に元氣げんきづいたが、お豊はポンと長煙管ながぎせるをはたいて、

「以前とちがつて、長吉も今が勉強べんけんざかりだしね……。」

「ははははは。間違まちがいでもあつちやならないというのかね。尤もつともだよ。この道みちばかりは全く油断あせりがならないからな。」

「ほんとさ。お前さん。」お豊は首を長く延して、「私の僣目かも知れないが、実はどうも長吉の様子が心配でならないのさ。」

「だから、いわない事ツちやない。」と蘿月は軽く握り拳で膝頭をたたいた。お豊は長吉とお糸のことが唯何となしに心配でならない。というのは、お糸が長唄の稽古帰りに毎朝用もないのにきつと立寄つて見る、それをば長吉は必ず待つている様子でその時間頃には一足だつて窓の傍を去らない。そのみならず、いつぞやお糸が病気で十日ほども寝ていた時には、長吉は外目も可笑しいほどにぼんやりしていた事などを息もつかずに語りつづけた。

次の間の時計が九時を打出した時突然格子戸ががらりと明いた。その明けようでお豊はすぐに長吉の帰つて来た事を知り急に話を途切しその方に振返りながら、

「大変早いようだね、今夜は。」

「先生が病気で一時間早くひけたんだ。」

「小梅の伯父さんがおいでだよ。」

返事は聞えなかったが、次の間に包を投出す音がして、直様長吉は温順しそうな弱そうな色の白い顔を襖の間から見せた。

残暑の夕日が一しきり夏の盛よりも烈しく、ひろびろした河面一帯に燃え立ち、殊  
 更に大学の艇庫の真白なペンキ塗の板目に反映していたが、忽ち燈の光の消えて行くよ  
 うにあたりは全体に薄暗く灰色に変色して来て、満ち来る夕汐の上を滑って行く荷船の  
 帆のみが真白く際立った。と見る間もなく初秋の黄昏は幕の下るように早く夜に変  
 った。流れる水がいやに眩しくきらきら光り出して、渡船に乗っている人の形をくつ  
 きりと墨絵のように黒く染め出した。堤の上に長く横わる葉桜の木立は此方の岸から望め  
 ば恐しいほど真暗になり、一時は面白いように引きつづいて動いていた荷船はいつの間  
 にか一艘残らず上流の方に消えてしまつて、釣の帰りらしい小舟がところどころ木の葉  
 のように浮いているばかり、見渡す隅田川は再びひろびろとしたばかりか静に淋しくな  
 った。遙か川上の空のはずれに夏の名残を示す雲の峰が立っていて細い稲妻が絶間なく  
 閃めいては消える。

長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は今戸橋の欄干に凭れたり、或時は岸の石

垣から渡場の棧橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めていた。今夜暗くなつて人の顔がよくは見えない時分になつたら今戸橋の上でお糸と逢う約束をしたからである。しかし丁度日曜日になつて夜学校を口実にも出来ない処から夕飯を済すが否やまだ日の落ちぬ中ふいと家を出てしまつた。一しきり渡場へ急ぐ人の往来も今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が慶養寺の高い木立を倒に映した山谷堀の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添う低い小家の格子戸外には裸体の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう来る時分であらうと思つて一心に橋向うを眺めた。

最初に橋を渡つて来た人影は黒い麻の僧衣を着た坊主であつた。つづいて尻端折の股引にゴム靴をはいた請負師らしい男の通つた後、暫くしてから、蝙蝠傘と小包を提げた貧し気な女房が日和下駄で色気もなく砂を蹴立てて大股に歩いて行つた。もういくら待つても人通りはない。長吉は詮方なく疲れた眼を河の方に移した。河面は先刻よりも一体に明るくなり気味悪い雲の峯は影もなく消えている。長吉はその時長命寺辺の堤の上の木立から、他分旧曆七月の満月であらう、赤味を帯びた大きな月の昇りかけているのを認めた。空は鏡のように明いのでそれを遮る堤と木立はますます黒く、星は宵の明

星の唯た一つ見えるばかりでその他は尽く余りに明い空の光に掻き消され、横ぎまに長く  
 棚曳く雲のちぎれが銀色に透通つて輝いている。見る見る中満月が木立を離れるに従い  
 河岸の夜露をあびた瓦屋根や、水に湿れた棒杭、満潮に流れ寄る石垣下の藻草のちぎ  
 れ、船の横腹、竹竿なぞが、逸早く月の光を受けて蒼く輝き出した。忽ち長吉は自分  
 の影が橋板の上に段々に濃く描き出されるのを知った。通りかかるホーカイ節の男女が二  
 人、「まあ御覧よ。お月様。」といつて暫く立止つた後、山谷堀の岸辺に曲るが否や当  
 付がましく、

書生さん橋の欄干に腰打かけて――

と立ちつづく小家の前で歌つたが金にならないと見たか歌いも了らず、元の急足で吉  
 原土手の方へ行つてしまった。

長吉はいつも忍会の恋人が経験するさまざまの懸念と待ちあぐむ心のいらだちの外  
 に、何とも知れぬ一種の悲哀を感じた。お糸と自分との行末……行末というよりも今夜会  
 つて後の明日はどうなるのであろう。お糸は今夜兼てから話のしてある葭町の芸者  
 屋まで出掛けて相談をして来るといふ事で、その道中をば二人一緒に話しながら歩  
 こうと約束したのである。お糸がいよいよ芸者になつてしまえばこれまでのように毎日逢

う事ができなくなるのみならず、それが万事の終りであるらしく思われてならない。自分の知らない如何にも遠い国へと再び帰る事なく去つてしまふような気がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみじみ思った。

あらゆる記憶の数々が電光のように閃く。最初地方町の小学校へ行く頃は毎日のように喧嘩して遊んだ。やがては皆なから近所の板塀や土蔵の壁に相々傘をかかれて囃された。小梅の伯父さんにつれられて奥山の見世物を見に行つたり池の鯉に麩をやつたりした。

三社祭の折お糸は或年踊屋台へ出て道成寺を踊つた。町内一同で毎年汐干狩りに行く船の上でもお糸はよく踊つた。学校の帰り道には毎日のように待乳山の境内で待合せて、人の知らない山谷の裏町から吉原田圃を歩いた……。ああ、お糸は何故

芸者なんぞになるんだらう。芸者なんぞになつちやいけないと引止めたい。長吉は無理にも引止めねばならぬと決心したが、すぐその傍から、自分はお糸に対しては到底それだけの威力のない事を思返した。果敢い絶望と諦めとを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、この頃になつては長吉は殊更に日一日とお糸が遙か年上の姉であるような心持がしてならぬのであつた。いや最初からお糸は長吉よりも強かつた。長吉よりも遙に臆病ではなかつた。お糸長吉と相々傘にかかれて皆なから囃された時でもお糸はびくとも

しなかつた。平気な顔で長ちゃんはあたいの旦那だよと怒鳴つた。去年初めて学校からの帰り道を待乳山で待ち合わそうと申出したのもお糸であつた。宮戸座の立見へ行こうといつたのもお糸が先であつた。帰りの晩くなる事をもお糸の方がかえつて心配しなかつた。知らない道に迷つても、お糸は行ける処まで行つて御覧よ。巡查さんにきけば分るよといつて、かえつて面白そうにずんずん歩いた……。

あたりを構わず橋板の上に吾妻下駄を鳴す響がして、小走りに突然お糸がかけ寄つた。「おそかつたでしょう。気に入らないんだもの、母さんの結つた髪なんぞ。」と馳け出したために殊更ほつれた鬢を直しながら、「おかしいでしょう。」

長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかりである。いつもと変りのない元気のいいはしやぎ切つた様子がこの場合むしろ憎らしく思われた。遠い下町に行つて芸者になつてしまうのが少しも悲しくないのかと長吉はいいたい事も胸一ぱいになつて口には出ない。お糸は河水を照す玉のような月の光にも一向気のつかない様子で、

「早く行こうよ。私お金持ちだよ。今夜は。仲店で土産を買つて行くんだから。」とすたすた歩きだす。

「明日、きつと帰るか。」長吉は吃るようにしていい切つた。

「明日帰らなければ、明後日あさっての朝はきつと帰つて来てよ。不断着だの、いろんなもの持つて行かなくつちやならないから。」

待乳山の麓ふもとを 聖天しょうてん町ちやうの方へ出ようと細い路地ろじをぬけた。

「何故なぜ黙つてるのよ。どうしたの。」

「明後日あさって帰つて来てそれからまたあつちへ去いつてしまふんだらう。え。お糸ちゃんはまだそれなり向うの人になつちまうんだらう。もう僕とは会えないんだらう。」

「ちよいちよい遊びに帰つて来るわ。だけれど、私も一生懸命わたいにお稽古けいこしなくつちやならないんだもの。」

少しは声を曇くもらしたもののその調子は長吉の満足するほどの悲愁を帯びてはいなかった。

長吉は暫しばらくしてからまた突然に、

「なぜ芸者なんぞになるんだ。」

「またそんな事きくの。おかしいよ。長さんは。」

お糸は已すでに長吉のよく知っている事情をば再びくどくどしく繰返くりかえした。お糸が芸者になるといふ事は二、三年いやもつと前から長吉にも能く分よつていた事である。その起因おこりは大工であつたお糸の父親がまだ生きていた頃から母親おふくろは手内職てないしよくにと針仕事をしていた

が、その得意先とくいさきの一軒で橋場はしばの妾宅しょうたくにいる御新造ごしんぞがお糸の姿を見て是非娘むすめぶん分によしちよして行末ゆくすえは立派な芸者げいしやにしたてたいといひ出した事からである。御新造の実家は葎よしちよ町うで幅うのきく芸者家げいしやであつた。しかしその頃のお糸の家うちはさほどに困つてもいなかつたし、第一に可愛い盛さかりの子供を手放すのが辛つらかつたので、親の手元でせいぜい芸を仕込ます事になつた。その後父親ごが死んだ折には差さしあたり頼りのない母親は橋場の御新造の世話で今の煎餅屋せんべいやを出したような関係もあり、万事が金銭上の義理ばかりでなくて相方そうほうの好意から自然とお糸は葎町へ行くように誰たれが強しいともなく決きまつていたのである。百も承知しているこんな事情を長吉はお糸の口からきくために質問したのでない。お糸がどうせ行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分のために別わかれを惜しむような調子を見せてもらいたいと思つたからだ。長吉は自分とお糸の間にはいつの間まにか互たがいに疎通たがしない感情の相違あきの生じている事を明あきらかに知つて、更に深い悲かなしきを感じた。

この悲みはお糸が土産物を買うため仁王門におうもんを過ぎて仲店なかみせへ出た時更にまた堪えがたいものとなつた。夕涼ゆうすずみに出掛ける賑にぎやかな人出の中にお糸はふいと立止つて、並んで歩く長吉の袖そでを引き、「長さん、あたしも直じきあんな扮装なりするんだねえ。紹縮緬ろちりめんだねきつと、あの羽織……。」

長吉はいわれるままに見返ると、島田に結った芸者と、それに連立つれだつて行くのは黒緞くろろうの紋付をきた立派な紳士であつた。ああお糸が芸者になつたら一緒に手を引いて歩く人はやつぱりああいう立派な紳士であろう。自分は何年たつたらあんな紳士になれるのか知らへへこおひ兵児帯一ツの現在の書生姿いまがいうにいわれず情なく思われると同時に、長吉はその将来どころか現在においても、已すでに単純なお糸の友達たる資格さえないもののような心持がした。いよいよ御神燈ごしんとうのつづいた葭町の路地口ろじぐちへ来た時、長吉はもうこれ以上果敢はかないとか悲しいとか思う元氣さえなくなつて、唯ただぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行先知れず曲まがりこ込んでいるのを不思議そうに覗のぞきこ込むばかりであつた。

「あの、一ひ二ふ三みイ……四つ目の瓦斯燈ガスとうの出てるところだよ。松葉屋まつばやと書いてあるだろう。ね。あの家うちよ。」とお糸はしばしば橋場の御新造につれて来られたり、またはその用事で使いに來たりして能く知よつてゐる軒先のきさきの燈あかりを指し示した。

「じゃア僕は帰るよ。もう……。」というばかりで長吉はやはり立止たつてゐる。その袖をお糸は軽く捕つかまへてたちまこひひ媚こむひるように寄添よい、

「明日あしたか明後日あさつて、家うちへ歸かつて來た時ときつと逢あおうね。いいかい。きつとよ。約束してよ。あたいの家うちへお出いでよ。よくツて。」

「ああ。」

返事をきくと、お糸はそれですつかり安心したものの如くすたすた路地の溝板を吾妻下駄に踏みならし振返りもせずに行つてしまった。その足音が長吉の耳には急いで馳けて行くように聞えた、かと思つてもなく、ちりんちりと格子戸の鈴の音がした。長吉は覚えず後を追つて路地内へ這入ろうとしたが、同時に一番近くの格子戸が人声と共に開いて、細長い弓張提灯を持った男が出て来たので、何という事なく長吉は氣後れのしたばかりか、顔を見られるのが厭さに、一散に通りの方へと遠かつた。円い月は形が大分小くなつて光が蒼く澄んで、静に聳える裏通りの倉の屋根の上、星の多い空の真中に高く昇つていた。

三

月の出が夜ごとおそくなるにつれてその光は段々冴えて来た。河風の湿ッぽさが次第に強く感じられて来て浴衣の肌がいやに薄寒くなつた。月はやがて人の起きている頃にはもう昇らなくなつた。空には朝も昼過ぎも夕方も、いつでも雲が多くなつた。雲は重り合

つて絶えず動いているので、時としては僅かにその間々々に殊更らしく色の濃い青空の残りを見せて置きながら、空一面に蔽い冠さる。すると気候は恐しく蒸暑くなつて来て、自然と浸み出る脂汗が不愉快に人の肌をねばねばさせるが、しかしまた、そういう時にはきまつて、その強弱とその方向の定まらない風が突然に吹き起つて、雨もまた降つては止み、止んではまた降りつづく事がある。この風やこの雨には一種特別の底深い力が含まれていて、寺の樹木や、河岸の葦の葉や、場末につづく貧しい家の板屋根に、春や夏には決して聞かれない音響を伝える。日が恐しく早く暮れてしまうだけ、長い夜はすぐに寂々と更け渡つて来て、夏ならば夕涼みの下駄の音に遮られてよくは聞えない八時か九時の時の鐘があたりをまるで十二時の如く静にしてしまう。蟋蟀の声はいそがしい燈火の色はいやに澄む。秋。ああ秋だ。長吉は初めて秋というものはなるほどいやなものだ。実に淋しくつて堪らないものだと思ひ身にしみじみ感じた。

学校はもう昨日から始つている。朝早く母親の用意してくれる弁当箱を書物と一所に包んで家を出て見たが、二日目三日目にはつくづく遠い神田まで歩いて行く氣力がなくなつた。今までは毎年長い夏休みの終る頃といえは学校の教場が何となく恋しく授業の開始する日が心待に待たれるようであつた。そのういういしい心持はもう全く消えてしま

った。つまらない。学問なんぞしたってつままるものか。学校は己れの望むような幸福を与える処ではない。……幸福とは無関係のものである事を長吉は物新しく感じた。

四日目の朝いつものように七時前に家を出て観音の境内まで歩いて来たが、長吉はまるで疲れきった旅人が路傍の石に腰をかけるように、本堂の横手のベンチの上に腰を下した。いつの間に掃除をしたものか朝露に湿った小砂利の上には、投捨てた汚い紙片もなく、朝早い境内はいつもの雑沓に引かえて妙に広く神々しく寂としている。

本堂の廊下には此処で夜明ししたらしい迂散な男が今だに幾人も腰をかけていて、その中には垢じみた単衣の三尺帯を解いて平気で禪をしめ直している奴もあつた。この頃の空癖で空は低く鼠色に曇り、あたりの樹木からは虫囀んだ青いままの木葉が絶え間なく落ちる。烏や鶏の啼声鳩の羽音が爽かに力強く聞える。溢れる水に濡れた御手洗の石が翻える奉納の手拭のかげにもう何となく冷いように思われた。それにもかかわらず朝参りの男女は本堂の階段を上る前にいずれも手を洗うためにと立止まる。その人々の中に長吉は偶然にも若い一人の芸者が、口には桃色のハンケチを啣えて、一重羽織の袖口を濡すまいためか、真白な手先をば腕までも見せるように長くさし伸しているのを認めた。同時にすぐ隣のベンチに腰をかけている書生が二人、「見ろ見ろ、ジンゲルだ。わるくな

いなア。」といっているのさえ耳にした。

島田に結ゆつて弱々しく両肩の撫なで下さった小作りの姿と、口尻くちじりのしまった円顔まるがお、十六、七の同じような年頃とが、長吉をしてその瞬間危あやうくベンチから飛び立たせようとしたほどお糸のことを連想せしめた。お糸は月のいいあの晩に約束した通り、その翌々日に、それからは長く葭よしちよう町の人たるべく手荷物を取りに帰つて来たが、その時長吉はまるで別の人のようにお糸の姿の変つてしまつたのに驚いた。赤いメレンスの帯ばかり締しめていた娘姿が、突然たつた一日の間に、丁度今御手洗みたらしで手を洗っている若い芸者そのままの姿になつてしまつたのだ。薬指にはもう指環ゆびわさえ穿はめていた。用もないのに幾度いくたびとなく帯の間から鏡入れや紙入かみいれを抜き出して、白粉おしろいをつけ直したり鬢びんのほつれを撫なで上げたりする戸外そとには車を待たして置いていかにも急いそがしい大切な用件を身に帯びてるといつた風ふうで一時間もたつかたない中に帰つてしまつた。その帰りがけ長吉に残した最後の言葉はその母親の「御師匠おししょうさんのおばさん」にもよろしくいつてくれという事であつた。まだ何時いつ出るのか分らないからまた近い中に遊びに来るわという懐なつかしい声も聞きれないのではなかつたが、それはもう今までのあどけない約束ではなくて、世馴よなれた人の如才じよさいない挨拶あいさつとしか長吉には聞取れなかつた。娘であつたお糸、幼馴染おきななじみの恋人のお糸はこの世にはもう

生きていないのだ。路傍みちばたに寝ている犬を驚おどろかして勢よく駈かけ去った車の後に、えもいわれず立迷った化粧の匂においが、いかに苦しく、いかに切せつなく身み中にしみ渡ったであらう……。

本堂の中にと消えた若い芸者の姿は再び階段の下に現れて仁王門におうもんの方へと、素足の指ゆび先に突掛けた吾妻下駄あずまげたを内輪うちわに軽く踏みながら歩いて行く。長吉はその後うしろすがた姿を見送るとまた更に恨めしいあの車を見送った時の一刹那いっせつなを思起すので、もう何なんとしても我慢が出来ぬというようにベンチから立上った。そして知らず知らずその後を追うて仲店なかみせの尽つきるあたりまで来たが、若い芸者の姿は何処どこの横よこ町ちやうへ曲まがってしまっただけのものか、もう見えない。両側の店では店先を掃除して品物を並べたてている最さい中ちゆうである。長吉は夢中で雷門かみなりもんの方へどんどん歩いた。若い芸者の行衛ゆくえを見究みきわめようというのではない。自分の眼にばかりありあり見えるお糸の後姿を追って行くのである。学校の事も何も彼かも忘れて、駒形こまかたから蔵前くらまえ、蔵前から浅草橋あさくさばし……それから葎よしちやう町ちやうの方へとどんどん歩いた。しかし電車の通とおっている馬喰町ばくろちやうの大通りまで来て、長吉はどの横町を曲ればよかつたのか少しく当惑した。けれども大体の方角はよく分っている。東京に生れたものだけに道をきくのが厭いやである。恋人の住む町と思えば、その名を徒いたずらに路傍みちばたの他人に漏もすのが、心の秘密を探られるようで、唯たわけもなく恐おそしくてならない。長吉は仕方なしに唯ただ左へ左へと、

いかげんに折れて行くと蔵造りの問屋らしい商家のつづいた同じような堀割の岸に二度も出た。その結果長吉は遙か向うに明治座の屋根を見てやがてやや広い往来へ出た時、その遠い道のはずれに河蒸汽船の汽笛の音の聞えるのに、初めて自分の位置と町の方角とを覚った。同時に非常な疲労を感じた。制帽を冠った額のみならず汗は袴をはいた帯のまわりまでしみ出していた。しかしもう一瞬間とても休む気にはならない。長吉は月の夜に連れられて来た路地口をば、これはまた一層の苦心、一層の懸念、一層の疲労を以つて、やつとの事で見出し得たのである。

片側に朝日がさし込んでるので路地の内は突当りまで見透された。格子戸づくりの小さい家ばかりでない。昼間見ると意外に屋根の高い倉もある。忍返しをつけた板塀もある。その上から松の枝も見える。石灰の散った便所の掃除口も見える。塵芥箱の並んだ処もある。その辺に猫がうろうろしている。人通りは案外に烈しい。極めて狭い溝板の上を通行の人は互に身を斜めに捻向けて行き交う。稽古の三味線に人の話声が交つて聞える。洗物する水音も聞える。赤い腰巻に裾をまくつた小女が草箒で溝板の上を掃いている。格子戸の格子を一本々々一生懸命に磨いているのもある。長吉は人目の多いのに気後れしたのみでなく、さて路地内に入つたにした処で、自分はどうか

するのかと初めて反省の地位に返った。人知れず松葉屋まつばやの前を通つて、そつとお糸の姿を垣間見たいとは思つたが、あたりが余りに明過あかるすぎる。さらばこのまま路地口に立つていて、お糸が何かの用で外へ出るまでの機会を待とうか。しかしこれもまた、長吉には近所の店先の人目が尽く自分ばかりを見張つていように思われて、とても五分と長く立つてゐる事はできない。長吉はとにかく思案しあんをしなおすつもりで、折から近所の子供を得意にする粟餅屋あわもちやの爺じいがカラカラカラと杵きねをならして来る向うの横町よこちょうの方へと遠かつた。

長吉は浜町はまちょうの横町をば次第に道の行くままに大川端おおかわばたの方へと歩いて行つた。いかほど機会を待つても昼中ひるなかはどうしても不便である事を僅わずかに悟り得たのであるが、すると、今度はもう学校へは遅くなつた。休むにしても今日の半日、これから午後の三時までをどうして何処どこに消費しようかという問題の解決に迫せめられた。母親のお豊とよは学校の時間割までをよく知抜しりぬいてるので、長吉の帰りが一時間早くても、晩おそくても、すぐに心配して煩うるさく質問する。無論長吉は何とでも容易たやすくい紛まぎらすことは出来ると思ふものの、それだけの嘘うそをつく良心の苦痛に逢あうのが厭いやでならない。丁度来かかる川端には、水練場すいれんばの板小屋が取払われて、柳の木蔭こかげに人が釣つりをしている。それをば通りがかりの人が四人も五人もぼんやり立つて見ているので、長吉はいい都合だと同じように釣を眺ふりめる振ふりでそのそ

ばに立寄つたが、もう立つてゐるだけの力さえなく、柳の根元の支木に背をよせかけながら蹲踞しゃがんでしまった。

さつきから空の大半は真青まっさおに晴れて来て、絶えず風の吹き通うにもかかわらず、じりじり人の肌よに焼附やきつくような湿気しつけのある秋の日は、目の前なる大川おおかわの水一面すいに眩まぶしく照り輝くので、往來の片側に長くつづいた土塀どべいからこんもりと枝を伸した繁しげりの蔭かげがいかにも涼しそうに思われた。甘酒屋あまさけやの爺じいがいつかこの木蔭こかげに赤く塗つた荷おろを下おろしていた。川

向こうは日の光の強いために立続く人家の瓦屋根かわらやねをはじめ一帯の眺望てうぼうがいかに汚よごらしく見え、風に追いやられた雲の列さかんが盛ばいに煤煙ばいえんを吐はく製造場せいぞうばの烟筒けむだしよりも遙はるかに低く、動うごかずに層をなして浮うかんでゐる。釣道具つりものを売る後の小家こいえから十一時の時計が鳴つた。長吉は数えながらそれを聞いて、初めて自分はいかに長い時間を歩き暮したかに驚いたが、同時にこの分ぶんで行けば三時までの時間を空費くうひするのもさして難かたくはないとやや安心あんしんすることも出来た。長吉は釣師つりしの一人が握飯にぎりめしを食たいはじめたのを見て、同じように弁当箱べんとうばを開いた。開いたけれども何だか気まりが悪くて、誰か見ていやしくないかときよろきよる四辺あたりを見廻みまわした。幸い午ひるぢか近くのことで見渡す川岸かわぎしに人の往來は杜絶とだえている。長吉は出来るだけ早く飯めしでも菜さいでも皆みんなな鵜呑うのみにしてしまつた。釣師つりしはいずれも木像もくざうのように黙もくつてゐる

し、甘酒屋の爺は居眠りしている。午過ひるすぎの川端はますます静しずかになって犬さえ歩いて来ない処から、さすがの長吉も自分は何故なぜこんなに気まりを悪がるのであろう。臆おくびよう病びようなのであろうと我ながら可笑おかしい気にもなつた。

両国橋りやうこくばしと新大橋しんおおはしとの間を一ひとまわり廻まわした後のち、長吉はいよいよ浅草あさくさの方へ帰ろうと決心するにつけ、「もしや」という一念にひかされて再び葎町の路地口に立寄つて見た。すると午前ひるまえほどには人通りがないのに先まず安心して、おそろおそろ松葉屋の前を通つて見たが、家うちの中は外から見ると非常に暗く、人の声三味線の音さえ聞えなかつた。けれども長吉には誰にも咎とがめられずに恋人の住む家うちの前を通つたというそれだけの事が、殆どほと破天荒はてんかうの冒険を敢あえてしたような満足を感じさせたので、これまで歩きぬいた身の疲労と苦痛とを長吉は遂ついに後悔しなかつた。

#### 四

その週間の残りの日数ひかずだけはどうかやらこうやら、長吉は学校へ通つたが、日曜日一日を過すすとその翌朝あくるあさは電車に乗つて上野うえのまで来ながらふいと下りおりてしまった。教師に差出

すべき代数の宿題を一つもやつて置かなかつた。英語と漢文の下読したよみをもして置かなかつた。それのみならず今日はまた、凡そ世およの中で何よりも嫌いな何よりも恐しい機械体操のある事を思い出したからである。長吉には鉄棒さかさから逆にぶらさがったり、人の丈たけより高い棚の上から飛び下りるような事は、いかに軍曹ぐんそう上りの教師から強しいられても全級の生徒から一斉いつせいに笑われても到底出来得うべきことではない。何によらず体育の遊戯けいぶにかけては、長吉はどうしても他の生徒一同ともなに伴って行く事が出来ないので、自然と軽侮けいぶの声の中に孤立する。その結果は、遂に一同から意地悪いぢあくくいじめられる事になりやすい。学校は単にこれだけでも随分厭いやな処、苦しいところ、辛い処であつた。されば長吉はその母親がいかほど望んだ処で今になつては高等学校へ這入はいろうという気は全くない。もし入学すれば校則として当初はじめの一年間は是非とも狂暴無残な寄宿舎生活をしなければならぬ事を聴知ききしつていたからである。高等学校寄宿舎内に起るいろいろな逸話いつわは早くから長吉の胆きもを冷ひやしていたのであつた。いつも画学と習字にかけては全級誰も及ぶもののない長吉の性情は、鉄てつけ拳けんだとか柔術だとか日本魂やまとだましだとかいうものよりも全く異ちがつた他の方面に傾かたいていた。子供の時から朝夕に母が渡世とせの三味線しゃみせんを聴くのが大好きで、習わずして自然に絃いとの調子を覚え、町を通る流行はやりうた唄うたなどは一度聴けば直すぐに記憶する位であつた。小梅こうめの伯父なる

蘿月宗匠は早くも名人になるべき素質があると見抜いて、長吉をば檜物町でも植うえき木店だなでも何処どこでもいいから一流の家元へ弟子入をさせたらばとお豊に勧めたがお豊は断じて承諾しなかつた。のみならず以来は長吉に三味線を弄いじる事をば口喧くちやかましく禁止した。長吉は蘿月の伯父さんのいったように、あの時分から三味線を稽古けいこしたなら、今頃はとにかく一人前いちにんまえの芸人になつていたに違いない。さすればよしやお糸が芸者になつたにしたら、こんな悲惨みじめな目に遇あわずとも済んだであらう。ああ実に取返しうらめのつかない事をした。一生の方針を誤つたと感じた。母親が急に憎くなる。例えられぬほど怨うらめれられた。に反して、蘿月の伯父さんの事が何なんとなく取とり継つがつて見たいように懐なつかしく思返された。これまでは何の気もなく母親からもまた伯父自身の口からも度々たびたび聞かされていた伯父が放蕩ほうとうざんまい三味の経歴が恋の苦痛を知り初そめた長吉の心には凡すべて新しい何かの意味を以て解ときざされはじめた。長吉は第一に「小梅の伯母さん」というのは元金瓶大黒の華魁おいらんで明治の初め吉原解放の時小梅の伯父さんを頼つて来たのだとやらしい話を思出した。伯母さんは子供の頃ころ自分をば非常に可愛がつてくれた。それにもかかわらず、自分の母親のお豊はあまり好よくは思つていない様子で、盆暮ぼんくれの挨拶あいさつもほんの義理一いっぺん遍べんらしい事を構そごわず素振あらわに現あらわしていた事さえあつた。長吉は此処ここで再び母親の事を不愉快にかつ憎らし

く思った。殆ど夜の目も離さぬほど自分の行いを目成っているらしい母親の慈愛が窮屈で堪らないだけ、もしこれが小梅の伯母さん見たような人であつたら——小梅のおばさんはお糸と自分の二人を見て何ともいえない情のある声で、いつまでも仲よくお遊びよといつてくれた事がある——自分の苦痛の何物たるかを能く察して同情してくれるであろう。自分の心がすこしも要求していない幸福を頭から無理に強いはせまい。長吉は偶然にも母親のような正しい身の上の女と小梅のおばさんのような或種の経歴ある女との心理を比較した。学校の教師のような人と蘿月伯父さんのような人とを比較した。

午頃まで長吉は東照宮の裏手の森の中で、捨石の上に横わりながら、こんな事を考えつづけた後は、包の中にかくした小説本を取出して読み耽つた。そして明日出すべき欠席届にはいかにしてまた母の認印を盗むべきかを考えた。

## 五

一しきり毎日毎夜のように降りつづいた雨の後、今度は雲一ツ見えないような晴天が幾日と限りもなくつづいた。しかしどうかして空が曇ると忽ちに風が出て乾ききった道の砂

を吹散す。この風と共に寒さは日にまし強くなつて閉切つた家の戸や障子が絶間なく  
 がたりがたりと悲しげに動き出した。長吉は毎朝七時に始る学校へ行くため晩くも六時に  
 は起きねばならぬが、すると毎朝の六時が起るたびに、だんだん暗くなつて、遂には夜と  
 同じく家の中には燈火の光を見ねばならぬようになった。毎年冬のはじめに、長吉は  
 この鈍い黄色い夜明のランプの火を見ると、何ともいえぬ悲しい厭な気がするのである。母  
 親はわが子を励ますつもりで寒そうな寝衣姿のままながら、いつも長吉よりは早く起き  
 て暖い朝飯をばちやんと用意して置く。長吉はその親切をすまないと感じながら何分  
 にも眠くてならぬ。もう暫く炬燵にあたつていたいと思うのを、むやみと時計ばかり気に  
 する母にせきたてられて不平だらだら、河風の寒い往来へ出るのである。或時はあまり  
 に世話を焼かれ過るのに腹を立てて、注意される襟巻をわざと解きすてて風邪を引いて  
 やつた事もあつた。もう返らない幾年か前蘿月の伯父につれられお糸も一所に西の市へ  
 行つた事があつた……毎年その日の事を思い出す頃から間もなく、今年も去年と同じよ  
 うな寒い十二月がやつて来るのである。

長吉は同じようなその冬の今年と去年、去年とその前年、それからそれと幾年も溯つて  
 何心なく考えて見ると、人は成長するに従つていかに幸福を失つて行くものを明かに経

験した。まだ学校へも行かぬ子供の時には朝寒ければゆつくりと寝たいだけ寝ていられたばかりでなく、身体からだの方もまたそれほどに寒さを感じることが烈はげしくなかった。寒い風や雨の日にはかえって面白く飛び歩いたものである。ああそれが今の身になっては、朝早く今戸いまどの橋の白い霜を踏むのがいかにも辛つらくまた昼過ぎにはいつも木枯こがらしの騒ぐ待乳山まつちやまの老樹に、早くも傾く夕日の色がいかにも悲しく見えてならない。これから先の一年一年は自分の身にいかなる新しい苦痛を授けるのであろう。長吉は今年の十二月ほど日数ひかずの早くとつのを悲しく思つた事はない。観音かんのんの境内けいだいにはもう年としの市いちが立つた。母親のもとへとお歳暮のしるしにお弟子が持つて来る砂糖袋や鯉かつぶし節ふしなどがそろそろ床とこの間まへ並び出した。学校の学期試験は昨日きのうすんで、一方ひとかたならぬその不成績ふせいせきに対する教師の注意書ちゆういがきが郵便で母親の手許に送り届けられた。

初めから覚悟していた事なので長吉は黙つて首をたれて、何かにつけてすぐに「親一人一人」あわれと哀あツつぽい事をいい出す母親の意見を聞いていた。午ひるまえ前けいこ稽古けいこに来る小娘たちが帰つて後午のちひるすぎ過すぎには三時過ぎてからでなくては、学校帰りの娘たちはやって来ぬ。今が丁度母親が一番手すきの時間である。風がなくて冬の日が往来の窓一面にさしている。折から突然まだ格子戸こうしどをあけぬ先から、「御免ごめんなさい。」という華美はでな女の声、母親が驚いて

立つ間もなく上<sup>あがり</sup>の障子の外から、「おばさん、わたしよ。御無沙汰<sup>ごぶさた</sup>しちまって、お詫<sup>わ</sup>びに来たんだわ。」

長吉は顫<sup>ふる</sup>えた。お糸である。お糸は立派なセルの吾妻<sup>あずま</sup>コオトの紐<sup>ひも</sup>を解き解き上つて来た。「あら、長<sup>ちやう</sup>ちゃんもいたの。学校がお休み……あら、そう。」それから付けたように、ほほほと笑つて、さて丁寧<sup>ていねい</sup>に手をついて御辞儀<sup>ごじぎ</sup>をしながら、「おばさん、お変わりもありませんの。ほんとに、つい家<sup>うち</sup>が出にくいものですから、あれツきり御無沙汰<sup>ごぶさた</sup>しちまって……」

お糸は縮<sup>ちりめん</sup>緬<sup>ふろしき</sup>の風呂敷<sup>ふろしき</sup>につつんだ菓子折を出した。長吉は呆<sup>あつ</sup>気に取られたさまで物もいわずにお糸の姿<sup>みまも</sup>を目成<sup>みまも</sup>つている。母親もちよつと烟<sup>けむ</sup>に巻かれた形で進<sup>しんもつ</sup>物の礼を述べた後、「きれいにおなりだね。すっかり見違えちまったよ。」といった。

「いやにふけちまったでしょう。皆<sup>みんな</sup>そういつてよ。」とお糸は美しく微笑<sup>ほほえ</sup>んで紫縮緬<sup>むらさき</sup>の羽織の紐の解けかかったのを結び直すついでに帯の間から緋天鷲<sup>ひびろうど</sup>絨<sup>じゆ</sup>の煙草<sup>たばこ</sup>入<sup>いれ</sup>を出して、

「おばさん。わたし、もう煙草喫<sup>の</sup>むようになったのよ。生意気でしょう。」  
 今度は高く笑つた。

「こつちへおよんなさい。寒いから。」と母親のお豊は長火鉢の鉄瓶<sup>てつびん</sup>を下<sup>おろ</sup>して茶を入れ

ながら、「いつお弘ひろめしたんだえ。」

「まだよ。ずっと押詰おしづまってからですって。」

「そう。お糸ちゃんなら、きつと売れるわね。何しろ綺麗きれいだし、ちゃんともう地じは出来て  
いるんだし……。」

「おかげさまでねえ。」とお糸は言葉を切つて、「あつちの姉さんも大変に喜んでたわ。  
私なんかよりもつと大きなくせに、それア随分出来ない娘こがいるんですもの。」

「この節せつの事ことだから……。」お豊はふと気がついたように茶棚から菓子鉢を出して、「あ  
いにく何なんにもなくなつて……道どうりよう了りょうさまのお名物だつて、ちよつとおつなものだよ。」と  
箸はしでわざわざ摘つまんでやつた。

「お師匠つしよさん、こんちは。」と甲高かんだかな一本調子で、二人ふたりづれの小娘こなごが騒々さわさわしく稽古けいこにや  
つて来た。

「おばさん、どうぞお構かまいなく……。」

「なにいいんですよ。」といったけれどお豊はやがて次の間まへ立った。

長吉は妙きに氣きまりが悪わるくなつて自然うつつむに俯向うつむいたが、お糸の方は一向いこう変へつた様子ようすもなく小  
声こゑで、

「あの手紙届いて。」

隣の座敷では二人の小娘が声を揃えて、嵯峨やお室の花ざかり。長吉は首ばかり領付せてもじもじしている。お糸が手紙を寄越したのは一の酉の前時分であつた。つい家が出にくいというだけの事である。長吉は直様別れた後の生涯をこまごまと書いて送つたが、しかし待ち設けたような、折返したお糸の返事は遂に聞く事が出来なかつたのである。

「観音さまの市だわね。今夜一所に行かなくつて。あたい今夜泊つてツてもいいんだから。」

長吉は隣座敷の母親を気兼ねして何とも答える事ができない。お糸は構わず、

「御飯たべたら迎いに来てよ。」といったがその後で、「おばさんも一所にいらツしやるでしょうね。」

「ああ。」と長吉は力の抜けた声になつた。

「あの……。」「お糸は急に思出して、「小梅の伯父さん、どうなすつて、お酒に酔つて羽子板屋のお爺さんと喧嘩したわね。何時だったか。私怖くなツちまつたわ。今夜いらツしやればいいのに。」

お糸は稽古の隙を窺つてお豊に挨拶して、「じゃ、晩ほど。どうもお邪魔いたしましたし

た。」といいながらすたすた帰った。

## 六

長吉は風邪をひいた。七草過ぎて学校が始った処から一日無理をして通学したために、流行のインフルエンザに變つて正月一ぱい寝通してしまつた。

八幡さまの境内に今日は朝から初午の太鼓が聞える。暖い穏な午後おだやかひるすぎの日光が一面にさし込む表の窓の障子には、折々軒を掠める小鳥の影が閃き、茶の間の隅の薄暗い仏壇の奥までが明る見え、床の間の梅がもう散りはじめた。春は閉切つた家の中までも陽気におとずれて来たのである。

長吉は二、三日前から起きていたので、この暖い日をぶらぶら散歩に出掛けた。すつかり全快した今になって見れば、二十日以上も苦しんだ大病を長吉はもつけの幸いであつたと喜んでゐる。とても来月の学年試験には及第する見込みがないと思つていた処なので、病氣欠席の後といえ、落第しても母に対して尤至極な申訳ができると思ふからであつた。

歩いて行く中いつか浅草公園の裏手へ出た。細い通りの片側には深い溝があつて、それを越した鉄柵の向うには、処々の冬枯れして立つ大木の下に、五区の揚弓店の汚らしい裏手がつづいて見える。屋根の低い片側町の人家は丁度後から深い溝の方へと押詰められたような気がするので、大方そのためであらう、それほど混雑もせぬ往来がいつも妙に忙しく見え、うろろう徘徊している人相の悪い車夫がちよつと風采の小綺麗な通行人の後に煩く付き纏つて乗車を勧めている。長吉はいつも巡査が立番している左手の石橋から淡島さまの方までがずつと見透される四辻まで歩いて来て、通りがかりの人々が立止つて眺めるままに、自分も何という事なく、曲り角に出してある宮戸座の絵看板を仰いだ。

いやに文字の間をくツ付けて模様のように太く書いてある名題の木札を中央にして、その左右には恐しく顔の小さい、眼の大きい、指先の太い人物が、夜具をかついだような大きい着物を着て、さまざまな誇張的の姿勢で活躍しているさまが描かれてある。この大きい絵看板を蔽う屋根形の軒には、花車につけるような造り花が美しく飾りつけてあつた。

長吉はいかほど暖い日和でも歩いておるとさすがにまだ立春になつたばかりの事とて暫くの間寒い風をよける処をと思ひ出した矢先、芝居の絵看板を見て、そのまま狭い立見の

戸口へと進み寄った。内へ這入ると足場の悪い梯子段が立っていて、その中ほどから曲るあたりはもう薄暗く、臭い生暖かい人込の温気がなお更暗い上の方から吹き下りて来る。頻に役者の名を呼ぶ掛声が聞える。それを聞くと長吉は都会育ちの観劇者ばかりが経験する特種の快感と特種の熱情とを覚えた。梯子段の二、三段を一躍びに駆上つて人込みの中に割込むと、床板の斜になつた低い屋根裏の大向は大きな船の底へでも下りたような心持。後の隅々についている瓦斯の裸火の光は一ぱいに詰っている見物人の頭に遮られて非常に暗く、狭苦しいので、猿のように人のつかまつている前側の鉄棒から、向うに見える劇場の内部は天井ばかりがいかにも広々と見え、舞台は色づき濁つた空気のためにかえつて小さく甚遠く見えた。舞台はチョンと打つた拍子木の音に今丁度廻つて止つた処である。極めて一直線な石垣を見せた台の下に汚れた水色の布が敷いてあつて、後を限る書割には小さく大名屋敷の練塀を描き、その上の空一面をば無理にも夜だと思わせるように隙間もなく真黒に塗りたててある。長吉は観劇に對するこれまでの経験で「夜」と「川端」という事から、きつと殺し場に違いないと幼い好奇心から丈伸びをして首を伸すと、果せるかな、絶えざる低い大太鼓の音に例の如く板をバタバタ叩く音が聞えて、左手の辻番小屋の蔭から仲間と座を抱えた女とが大きな声で争い

ながら出て来る。見物人が笑った。舞台の人物は落したものを捜す体で何かを取り上げる  
と、突然前とは全く違った態度になつて、極めて明瞭に浄瑠璃外題「梅柳中宵月  
」、勤めまする役人……と読みはじめた。それを待構えて彼方此方から見物人が声をかけ  
た。再び軽い拍子木の音を合図に、黒衣の男が右手の隅に立てた書割の一部を引取ると袴  
を着た浄瑠璃語三人、三味線弾二人が、窮屈そうに狭い台の上に並んでいて、直ぐ  
に弾出す三味線からつづいて太夫が声を合してかたり出した。長吉はこの種の音楽にはい  
つも興味を以て聞き馴れているので、場内の何処かで泣き出す赤児の声とそれを叱咤する  
見物人の声に妨げられながら、しかも明かに語る文句と三味線の手までを聴き分ける。

朧夜おぼろよ

に星の影さへ二ツ三ツ、四ツか五ツか鐘の音も、もしや我身の追手かと……

またしても軽いバタバタが聞えて夢中になつて声をかける見物人のみならず場中一  
体が気色立つ。それも道理だ。赤い襦袢の上に紫襦子の幅広い襟をつけた座敷着の  
遊女が、冠る手拭に顔をかくして、前かがまりに花道から駈出したのである。「見え  
ねえ、前が高いツ。」帽子をとれツ。「馬鹿野郎。」なぞと怒鳴るものがある。

落ちて行衛も白魚の、舟のかがりに網よりも、人目いとうて後先に……

女に扮した役者は花道の尽きるあたりまで出て後を見返りながら台詞を述べた。その後

に唄がつづく。

しばしイむ上手より梅見返りの舟の唄。 忍ぶなら忍ぶなら闇の夜は置かしやん

せ、月に雲のさはりなく、辛気待つ宵、十六夜の、内の首尾はエーよいとのよいとの。 聞く辻占にいそいそと雲足早き雨空も、思ひがけなく吹き晴れて見かは

す月の顔と顔……

見物がまた騒ぐ。真黒に塗りたてた空の書割の中、中央を大きく穿抜いてある円い穴に灯がついて、雲形の蔽いをば糸で引上げるのが此方からでも能く見えた。余りに月が大きく明いから、大名屋敷の塀の方が遠くて月の方がかえって非常に近く見える。しかし長吉は他の見物も同様少しも美しい幻想を破られなかつた。そのみならず去年の夏の末、お糸を葭町へ送るため、待合した今戸の橋から眺めた彼の大きな円い円い月を思起すと、もう舞台は舞台でなくなつた。

着流し散髪の男がいかににも思いやつれた風で足許危く歩み出る。女と摺れちがいに顔を見合して、

「十六夜か。」

「清心さまか。」

女は男に縋<sup>すが</sup>つて、「逢<sup>あ</sup>ひたかつたわいなア。」

見物人が「やア御<sup>ご</sup>両<sup>りょう</sup>人<sup>にん</sup>。」「よいしよ。やけます。」などと叫ぶ。笑う声。「静かにしろい。」と叱<sup>しか</sup>りつける熱情家もあつた。

舞台は相愛<sup>あい</sup>する男女の入<sup>じゆすい</sup>水と共に廻<sup>まわ</sup>つて、女の方が白魚舟<sup>しらうおぶね</sup>の夜網<sup>よあみ</sup>にかかつて助けられる処になる。再び元の舞台に返<sup>かえ</sup>つて、男も同じく死ぬ事が出来なくて石垣<sup>いしがき</sup>の上に這<sup>は</sup>い上<sup>あが</sup>る。遠<sup>とほ</sup>くの騒<sup>さわ</sup>ぎ唄<sup>うた</sup>、富貴<sup>ふうき</sup>の羨<sup>せん</sup>望<sup>ぼう</sup>、生存<sup>せいぞん</sup>の快樂<sup>らくた</sup>、境遇<sup>きんぐい</sup>の絶望<sup>ぜつぼう</sup>、機会<sup>きかい</sup>と運命<sup>うんめい</sup>、誘惑<sup>ゆうわく</sup>、殺人<sup>せつじん</sup>。波瀾<sup>はらん</sup>の上にも脚色<sup>きゃくしき</sup>の波瀾<sup>はらん</sup>を極めて、遂<sup>つい</sup>に演劇<sup>えんげき</sup>の一<sup>ひと</sup>幕<sup>まく</sup>が終<sup>しま</sup>る。耳元<sup>みみもと</sup>近くから恐<sup>おそ</sup>しい黄<sup>き</sup>い声<sup>こゑ</sup>が、「変<sup>か</sup>るよ——ウ」と叫<sup>こゑ</sup>び出<sup>で</sup>した。見物人が出口<sup>でぐち</sup>の方<sup>かた</sup>へと崩<sup>なだ</sup>れ打<sup>う</sup>つて下<sup>お</sup>りかける。

長吉<sup>ながきち</sup>は外へ出ると急いで歩いた。あたりはまだ明<sup>あ</sup>いけれどもう日は当<sup>あた</sup>つていない。ごたごたした千束<sup>せんそく</sup>町<sup>まち</sup>の小売店<sup>こうりみせ</sup>の暖簾<sup>のれん</sup>や旗<sup>はた</sup>なぞが激<sup>おどろ</sup>しく翻<sup>ひる</sup>つてい<sup>がえ</sup>る。通りがかりに時間<sup>じかん</sup>を見るため腰<sup>こし</sup>をかがめて覗<sup>のぞ</sup>いて見ると軒<sup>のき</sup>の低<sup>ひ</sup>いそれらの家<sup>うち</sup>の奥<sup>おく</sup>は真<sup>ま</sup>暗<sup>くら</sup>であつた。長吉<sup>ながきち</sup>は病後<sup>びやうご</sup>の夕風<sup>ゆふかぜ</sup>を恐<sup>おそ</sup>れてますます歩<sup>あ</sup>みを早<sup>はや</sup>めたが、しかし山谷<sup>さんやほり</sup>堀<sup>ほり</sup>から今戸<sup>いまどほし</sup>橋<sup>はし</sup>の向<sup>む</sup>に開<sup>ひら</sup>ける隅<sup>すみ</sup>田川<sup>がわ</sup>の景色<sup>けしき</sup>を見ると、どうしても暫<sup>しば</sup>く立止<sup>た</sup>らずにはい<sup>ら</sup>れなくなつた。河<sup>か</sup>の面<sup>おもて</sup>は悲<sup>かな</sup>しく灰色<sup>かいろ</sup>に光<sup>あ</sup>つていて、冬の日の終<sup>しま</sup>りを急<sup>いそ</sup>がす水蒸氣<sup>すいじょうき</sup>は対岸<sup>たいがん</sup>の堤<sup>つゐ</sup>をおぼろに霞<sup>かす</sup>めている。荷船<sup>にぶね</sup>

の帆の間をば鷗が幾羽となく飛び交う。長吉はどんどん流れて行く河水をば何がなしに悲しいものだと思つた。川向の堤の上には一ツ二ツ灯がつき出した。枯れた樹木、乾いた石垣、汚れた瓦屋根、目に入るものは尽く褪せた寒い色をしているので、芝居を出てから一瞬間とても消失せない清心と十六夜の華美やかな姿の記憶が、羽子板の押絵のようにまた一段と際立つて浮び出す。長吉は劇中の人物をば憎いほどに羨んだ。いくら羨んでも到底及びもつかないわが身の上を悲しんだ。死んだ方がましだと思つただけ、一緒に死んでくれる人のない身の上を更に痛切に悲しく思つた。

今戸橋を渡りかけた時、掌でびしやりと横面を張撲るような河風。思わず寒さに胴顫いすると同時に長吉は咽喉の奥から、今までは記憶しているとも心付かずにした浄瑠璃の一節がわれ知らずに流れ出るのに驚いた。

今さらいふも愚痴なれど……

と清元一派が他流の模すべからざる曲調の美麗を托した一節である。長吉は無論太夫さんが首と身体を伸上らして唄ったほど上手に、かつまたそんな大きな声で唄つたのではない。咽喉から流れるままに口の中で低唱したのであるが、それによつて長吉はやみがたい心の苦痛が幾分か柔げられるような心持がした。今更いうも愚痴なれど……

…ほんに思えば……岸より覗く青柳の……と思出す節の、ところどころを長吉は家の格子戸を開ける時まで繰返し繰返し歩いた。

## 七

翌日の午後にもまたみやと宮戸座の立見に出掛けた。長吉は恋の二人が手を取って嘆く美しい舞台から、昨日始めて経験したいうべからざる悲哀の美感に酔いたいと思つたのである。そればかりでなく黒ずんだ天井と壁襖に囲まれた二階の室がいやに陰気臭くて、燈火の多い、人の大勢集つている芝居の賑いが、我慢の出来ぬほど恋しく思われてならなかつたのである。長吉は失つたお糸の事以外に折々は唯だ何という訳もなく淋しい悲しい気がする。自分にもどういふ訳だか少しも分らない。唯だ淋しい、唯だ悲しいのである。この寂寞この悲哀を慰めるために、長吉は定めがたい何物かを一刻一刻に激しく要求して止まない。胸の底に潜んだ漠然たる苦痛を、誰と限らず優しい声で答えてくれる美しい女に訴えて見たくてならない。単にお糸一人の姿のみならず、往来で摺れちがった見知らぬ女の姿が、島田の娘になつたり、銀杏返の芸者になつたり、または丸鬚の女房

姿になつたりして夢の中に浮ぶ事さえあつた。

長吉は二度見る同じ芝居の舞台をば初めてのように興味深く眺めた。それと同時に、今度は賑かな左右の棧敷さしきに対する観察をも決して閑却しなかつた。世の中にはあんなに大勢女がいる。あんなに大勢女がいる中で、どうして自分は一人も自分を慰めてくれる相手に邂逅めくりあわないのであろう。誰れでもいい。自分に一言ひとことやさしい語ことばをかけてくれる女さえあれば、自分はこんな切なくお糸の事ばかり思いつめてはいまい。お糸の事を思えば思うだけその苦痛をへらす他のものが欲しい。さすれば学校とそれに関連した身の前途に対する絶望のみに沈められてしまい……。

立見の混雑の中にその時突然自分の肩を突くものがあるので驚いて振向くと、長吉は鳥打帽りうちぼうを眉深まぶかに黒い眼鏡をかけて、後の一段高い床ゆかから首のぼを伸のびして見下みおろす若い男の顔を見た。

「吉きちさんじゃないか。」

そういつたものの、長吉は吉きちさんの風采ふうさいの余りに変つてゐるのに暫しばらくは二の句がつけなかつた。吉きちさんというのは地方町じかたまちの小学校時代の友達で、理髮師とこやをしている山谷さんやど通りの親爺おやじの店で、これまで長吉の髪をかつてくれた若衆わかいしゅである。それが絹ハンケチを首

に巻いて「二重廻の下から大島紬の羽織を見せ、いやに香水を匂わせながら、  
「長さん、僕は役者だよ。」と顔をさし出して長吉の耳元に囁いた。

立見の混雑の中でもあるし、長吉は驚いたまま黙っているより仕様がなかったが、舞台はやがて昨日の通りに河端の暗闘になって、劇の主人公が盗んだ金を懐中に花道へ駈出でながら石礫を打つ、それを合図にチョンと拍子木が響く。幕が動く。立見の人中から例の「変るよーウ」と叫ぶ声。人崩れが狭い出口の方へと押合う間に幕がすっかり引かれて、シャギリの太鼓が何処か分らぬ舞台の奥から鳴り出す。吉さんは長吉の袖を引止めて、

「長さん、帰るのか。いいじゃないか。もう一幕見ておいでな。」

役者の仕着せを着た賤しい顔の男が、渋紙を張った小箆をもって、次の幕の料金を集めに来たので、長吉は時間を心配しながらもそのまま居残った。

「長さん、綺麗だよ、掛けられるぜ。」吉さんは人のすいた後の明り取りの窓へ腰をかけた長吉が並んで腰かけるのを待つようにして再び「僕ア役者だよ。変ったろう。」といいながら友禅縮緬の襦袢の袖を引き出して、わざとらしく脱した黒い金縁眼鏡の曇りを拭きはじめた。

「変つたよ。僕ア始め誰かと思つた。」

「驚いたかい。ははははは。」吉さんは何ともいえぬほど嬉しそうに笑つて、「頼むぜ。」

長さん。こう見えたつて憚りながら役者だ。伊井一座の新俳優だ。明後日からまた新富町よ。出揃つたら見に来給え。いいかい。楽屋口へ廻つて、玉水を呼んでくれつて

いいたまえ。」

「玉水……?」

「うむ、玉水三郎……。」いいながら急しなく懐中から女持の紙入を探り出して、小さな名刺を見せ、「ね、玉水三郎。昔の吉さんじゃないぜ。ちゃんともう番附に出ているんだぜ。」

「面白いだろうね。役者になつたら。」

「面白かつたり、辛かつたり……しかし女にやア不自由しねえよ。」吉さんはちよつと長吉の顔を見て、「長さん、君は遊ぶのかい。」

長吉は「まだ」と答えるのがその瞬間男の恥であるような気がして黙つた。

「江戸一の梶田楼ツていう家を知つてるかい。今夜一緒にお出でな。心配しないでいいんだよ。のろけるんじゃないが、心配しないでいいわけがあるんだから。お安くない

だろう。ははははは。」と吉さんは他愛もなく笑った。長吉は突然に、

「芸者は高いんだろかね。」

「長さん、君は芸者が好きなのか、贅ぜいたく沢だ。」と新俳優の吉さんは意外らしく長吉の顔を見返したが、「知れたもんさ。しかし金で女を買うなんざア、ちツとお人が好過よすぎらア。

僕ア公園で二、三軒待合まちあいを知ってるよ。連れてツてやろう。万事方寸ばんじほうすんの中うちにありさ。」

先刻さつきから三人四人と絶えず上つて来る見物人で大向おおむこうはかなり雑沓ざつどうして来た。前の

幕から居残いざのこっている連中れんじゆうには待ちくたびれて手を鳴ならすものもある。舞台の奥から拍子

木の音が長い間まを置きながら、それでも次第に近く聞えて来る。長吉は窮屈きうくつに腰をかけた

明り取りの窓から立上る。すると吉さんは、

「まだ、なかなかだ。」と独言ひとりごとのようにいつて、「長さん。あれア廻りの拍子木とい

つて道具立どうぐだての出来上できあがりつたつて事を、役者の部屋の方へ知らせる合図なんだ。開あくまでに

やアまだ、なかなかよ。」

悠然として巻煙草まきたばこを吸い初める。長吉は「そうか」と感服したらしく返事をしながら、しかし立上ったままに立見の鉄格子から舞台の方を眺めた。花道から平土間ひらどまの柵ますの間あいだをば吉さんの如く廻りの拍子木の何たるかを知らない見物人が、すぐにも幕があくのかと思つ

て、出歩いていた外から各自の席に戻ろうと右方左方へと混雑している。横手の棧敷裏から斜に引幕の一方にさし込む夕陽の光が、その進み入る道筋だけ、空中に漂う塵と煙草の煙をばありありと眼に見せる。長吉はこの夕陽の光をば何という事なく悲しく感じながら、折々吹込む外の風が大きな波を打せる引幕の上を眺めた。引幕には市川〇〇丈へ、浅草公園芸妓連中として幾人となき書連ねた芸者の名が読まれた。暫くして、「吉さん、君、あの中で知ってる芸者があるかい。」

「たのむよ。公園は乃公たちの縄張中だぜ。」吉さんは一種の屈辱を感じたのであろう、嘘か誠か、幕の上にかいてある芸者の一人々々の経歴、容貌、性質を限りもなく説明しはじめた。

拍子木がチョンチョンと二ツ鳴った。幕開の唄と三味線が聞え引かれた幕が次第に細かく早める拍子木の律につれて片寄せられて行く。大向から早くも役者の名をよぶ掛け声。たいくつした見物人の話声が一時に止んで、場内は夜の明けたような一種の明るさと一種の活気を添えた。

お豊とよは今戸橋いまとはしまで歩いて来て時節じせつは今正いままじに爛漫らんまんたる春の四月である事を始めて知った。  
 手一ツの女世帯おんなじよたいに追われている身は空が青く晴れて日が窓に射込みさしこ、斜すじむ向こうの「宮みや  
 戸川やとがわ」という鰻屋うなぎやの門口かどぐちの柳が緑色の芽をふくのによつと時候の変遷を知るばかり。  
 いつも両側の汚れた瓦屋根かわらやねに四方あたりの眺望たっぼうを遮られた地面の低い場末の横町よこちようから、今  
 突然、橋の上に出て見た見た四月の隅田川すみだがわは、一年に二、三度と数えるほどしか外出そとでする事  
 のない母親お豊の老眼をば信じられぬほどに驚かしたのである。晴れ渡った空の下に、流  
 れる水の輝き、堤の青草、その上につづく桜の花、種々さまざまの旗ひらめが閃く大学の艇庫ていこ、その辺  
 から起る人々の叫び声、鉄砲てつぱうの響ひびき。渡船わたしぶねから上下りする花見の人の混雑。あたり一  
 面の光景は疲れた母親の眼には余りに色彩が強烈すぎるほどであった。お豊は渡場わたしばの方  
 へ下りかけたけれど、急に恐るる如く踵くびすを返して、金竜山きんりゆうざん下の日蔭ひかげになった瓦町かわらまち  
 を急いだ。そして通りがかりのなるべく汚い車、なるべく意気地いきぢのなさそうな車夫しやふを見付  
 けて恐る恐る、

「車屋さん、小梅こうめまで安くやって下さいな。」といった。

お豊は花見どころの騒ぎではない。もうどうしていいのか分らない。望みをかけた一人

息子の長吉は試験に落第してしまつたばかりか、もう学校へは行きたくない、学問はいやだといひ出した。お豊は途法とほうに暮れた結果、兄の蘿月らげつに相談して見るより外ほかに仕様がなと思つたのである。

三度目に掛合かけあつた老車夫が、やつとの事でお豊の望む賃銀で小梅行きを承知した。吾あずま妻橋ばしは午後ごごの日光と塵埃じんあいの中におびただしい人出ひとでである。着飾ちかじつた若い花見の男女を載いせて勢いきおいよく走る車の間をば、お豊を載せた老車夫は梶かじを振りながらよたよた歩いて橋を渡るや否いなや桜花さくらばなの賑にぎわいを外よそに、直すぐと中なかの郷ごうへ曲まつて業平橋なりひらばしへ出ると、この辺はもう春といつても汚けい鱗こけらぶき茸こけらぶきの屋根の上に唯ただ明あかるく日があたつていゝといふばかりで、沈滞しんたいした堀割ほりわりの水が麗うららかにな青空の色をそのままに映ひじている曳舟ひきふね通り。昔は金瓶きんべい楼ろうの小太夫こだゆうといわれた蘿月の恋女房は、綿衣ぬのこの襟えりもともとに手拭てぬぐいをかけ白粉おしろい焼やけのした皺しわの多い顔かほに一ぱいの日を受けて、子供の群むれがめんこや独楽こまの遊あそびをしている外ほかには至いたつて人通りの少すくい道端みちばたの格子戸こうしど先さきで、張板はりいたに張物はりものをしていた。駈かけて来て止とめる車と、それから下くだりるお豊の姿を見て、

「まあお珍しいじやありませんか。ちよいと今戸いまどの御師匠おししやうさんですよ。」と開あけたままの格子戸こうしどから家うちの内なかへと知らせる。内なかには主人あかの宗匠そうしやうが万年青おもとの鉢おもとを並ならべた縁えん先さきへ

小机を据え頼しきりに天地人てんちじんの順序をつける俳諧はいかいの選せんに急がしい処であった。

掛けている眼鏡をはずして、蘿月は机を離れて座敷の真中まんなかに坐り直ったが、襷たすきをとりながら這入はいつて来る妻のお滝たきと来訪のお豊、同じ年頃としごろの老いた女同士は幾度いくたびとなくお辞儀ゆずりあいの讓合ゆずりあいをしては長々しく挨拶あいさつした。そしてその挨拶の中に、「長ちゃんも御丈夫ですか。」「はア、しかし彼あれにも困りきります。」というような問答もんどうから、用件は案外に早く蘿月の前に提出される事になったのである。蘿月は静しずかに煙草たばこの吸殻すいからをはたいて、誰にかぎらず若い中うちはとかくに氣の迷うことがある。氣の迷っている時には、自分にも覺えがあるが、親の意見も仇あだとしか聞えない。他ほかから余り厳しく干渉するよりはかえって氣まかせにして置く方が薬になりはしまいかと論じた。しかし目に見えない将来の恐怖ばかりに満みされた女親の狭い胸にはかかる通人つうじんの放任主義は到底容れられべきものでない。お豊は長吉が久しい以前からしばしば学校を休むために自分の認印みとめいんを盗んで届書とどけしょを偽造していた事をば、暗黒な運命の前兆である如く、声まで潜ひそめて長々しく物語る……

「学校がいやなら如何どうするつもりだと聞いたら、まアどうでしょう、役者になるんだっていうんですよ。役老に。まア、どうでしょう。兄さん。私やそんなに長吉の根性が腐ちまッたのかと思つたら、もう実に口惜くやしくツてならないんですよ。」

「へーえ、役者になりたい。」訝る間もなく蘿月は七ツ八ツの頃によく三味線を弄物にした長吉の生立ちを回想した。「当人がたつてと望むなら仕方のない話だが……困つたものだ。」

お豊は自分の身こそ一家の不幸のために遊芸の師匠に零落したけれど、わが子までもそんな賤しいものにしては先祖の位牌に対して申訳がないと述べる。蘿月は一家の破産滅亡の昔をいい出されると勘当までされた放蕩三昧の身は、何につけ、禿頭をかきたいような当惑を感じる。もともと芸人社会は大好きな趣味性から、お豊の偏屈な思想をば攻撃したいと心では思うもののそんな事からまたしても長たらしく「先祖の位牌」を論じ出されては堪らないと危むので、宗匠は先ずその場を円滑に、お豊を安心させるようにと話をまとめた。

「とにかく一応は私が意見しますよ、若い中は迷うだけにかえって始末のいいものさ。今夜にでも明日にでも長吉に遊びに来るようにいつて置きなさい。私がつくと改心さして見せるから、まあそんなに心配しないがいいよ。なに世の中は案じるより産むが安いさ。」

お豊は何分よろしくと頼んでお滝が引止めるのを辞退してその家を出た。春の夕陽は赤々と吾妻橋の向うに傾いて、花見帰りの混雑を一層引立てて見せる。その中にお豊は殊

更元氣よく歩いて行く金ボタンの学生を見ると、それが果して大学校の生徒であるか否かは分らぬながら、我児わがこもあのような立派な学生に仕立てたいばかりに、幾年間女の身一人みひとつで生活と戦つて来たが、今は生命いのちに等しい希望の光も全く消えてしまったのかと思うと実に堪えられぬ悲愁に襲われる。兄の蘿月に依頼しては見たもののやっぱり安心が出来ない。なにも昔の道楽者だからという訳ではない。長吉に志を立てさせるのは到底人間業にんげんわざでは及ぬ事およぼ、神かみ仏ほとけの力に頼らねばならぬと思ひ出した。お豊は乗つて来た車から急に雷かみな門りもんで下りた。仲店なかみせの雑沓ざつとうをも今では少しも恐れずに観音堂へと急いで、祈願こらを凝こらした後に、お神籤みくじを引いて見た。古びた紙片かみきれに木版摺もくはんずりで、

お豊は大だい吉きちという文字を見て安心はしたものの、大だい吉きちはかえつて凶きように返りやすい事を思ひ出して、またもや自分からさまざまな恐怖を造出つくりだしつゝ、非常に疲れて家うちへ歸つた。

## 九

午後ひるすぎから亀井戸かめいどの竜眼寺りゅうがんじの書院で俳諧はいかいの運座うんざがあるというので、蘿月らげつはその日の午前ひるすぎに訪ねて来た長吉ちやうきちと茶漬ちやづけをすました後のち、小梅こうめの住居すまいから押上おしあげの堀割ほりわりを柳島やなぎしま

の方へと連れだつて話しながら歩いた。堀割は丁度真昼の引汐で真黒な汚ない泥土の底を見せている上に、四月の暖い日光に照付けられて、溝泥の臭気を盛に発散している。何処からともなく煤烟の煤が飛んで来て、何処という事なしに製造場の機械の音が聞える。道端の人家は道よりも一段低い地面に建てられてあるので、春の日の光を外に女房共がせつせと内職している薄暗い家内のさまが、通りながらにすっかりと見透される。そういう小家の曲り角の汚れた板目には売薬と易占の広告に交つて至る処女工募集の貼紙が目についた。しかし間もなくこの陰鬱な往来は迂曲りながらに少しく爪先上りになつて行くかと思うと、片側に赤く塗つた妙見寺の塀と、それに対して心持よく洗ひざらした料理屋橋本の板塀のために突然面目を一変させた。貧しい本所の一区が此処に尽きて板橋のかかつた川向うには野草に蔽われた土手を越して、亀井戸村の畠と木立とが美しい田園の春景色をひろげて見せた。蘿月は踏み止つて、

「私の行くお寺はすぐ向うの川端さ、松の木のそばに屋根が見えるだろう。」

「じゃ、伯父さん。ここで失礼しましょう。」長吉は早くも帽子を取る。

「いそぐんじやない。咽喉が乾いたから、まア長吉、ちよつと休んで行こうよ。」

赤く塗つた板塀に沿うて、妙見寺の門前に葭簀を張つた休茶屋へと、蘿月は先に腰を

第六十二大言

災さい 憾かん 時じ 々じ 退たい

わなはひもおひくはしりぞ  
き通ひぶくどのことなり

名な 蹟あ 四し 方ほう 揚あ

名のはまれおひく天下にか  
くれなしとの事なり

改か 故こ 重じゆう 乘じゆう 禄ろく

ふるき事は改りてふたしび禄  
をうるなり

昇か 高かう 福ふく 自じ 昌かう

りつしん出世してふつきはん  
じやうするていなり

くわんもうかなう 叶かなう べし 〇病人本ぶくす 〇うせもの出る 〇まち人びと  
きたる 〇屋づくりわたましさはりなし 〇たびだちよし 〇よ  
めとりむことりげんぶく人をかへる方よすよし

おろ下した。一直線の堀割はここも同じように引汐の汚い水底を見せていたが、遠くの畠の方から吹いて来る風はいかにも爽かで、天神様の鳥居が見える向うの堤の上には柳の若芽が美しく閃いているし、すぐ後の寺の門の屋根には雀と燕が絶え間なく囀っている、其処此処に製造場の烟出しが幾本も立っているにかかわらず、市街からは遠い春の午後ひるすぎの長閑さは充分に心持よく味われた。蘿月は暫くあたりを眺めた後、それとなく長吉の顔をのぞくようにして、

「さっきの話は承知してくれたらうな。」

長吉は丁度茶を飲みかけた処なので、領付いたまま、口に出して返事はしなかつた。

「とにかくもう一年辛抱しなさい。今の学校さえ卒業しちまえば……母親だつて段々取る年だ、そう頑固ばかりもいやアしまいから。」

長吉は唯だ首を領付かせて、何処と当もなしに遠くを眺めていた。引汐の堀割に繋いだ土船からは人足が二、三人して堤の向うの製造場へと頻りに土を運んでいる。人通りといつては一人もない此方の岸をば、意外にも突然二台の人力車が天神橋の方から駈けて来て、二人の休んでいる寺の門前で止つた。大方墓参りに来たのであろう。町家の内儀らしい丸髷の女が七、八ツになる娘の手を引いて門の内へ這入つて行つた。

長吉は蘿月の伯父と橋の上で別れた。別れる時に蘿月は再び心配そうに、

「じゃ……。」「といて暫く黙つた後、「いやだろうけれど当分辛抱しなさい。親孝行して置けば悪い報はないよ。」

長吉は帽子を取つて軽く礼をしたがそのまま、駈けるように早足に元来た押上の方へ歩いて行つた。同時に蘿月の姿は雑草の若芽に蔽われた川向うの土手の陰にかくれた。

蘿月は六十に近いこの年まで今日ほど困つた事、辛い感情に迫められた事はないと思つたのである。妹お豊のたのみも無理ではない。同時に長吉が芝居道へ這入ろうという希望もまたわるいとは思われない。一寸の虫にも五分の魂で、人にはそれぞれの氣質がある。

よかれあしかれ、物事を無理に強いるのはよくないと思つているので、蘿月は両方から板ばさみになるばかりで、いずれにとも賛同する事ができないのだ。殊に自分が過去の経歴を回想すれば、蘿月は長吉の心の中は問わずとも底の底まで明かに推察される。若い頃の自分には親代々の薄暗い質屋の店先に坐つて麗かな春の日を外に働きくらすのが、いかに辛くいかに情なかつたであろう。陰気な燈火の下で大福帳へ出入の金高を書き入れるよりも、川添いの明い二階家で洒落本を読む方がいかに面白かつたであろう。長吉は髻を生した堅苦しい勤め人などになるよりも、自分の好きな遊芸で世を渡りたいとい

う。それも一生、これも一生である。しかし蘿月は今よんどころなく意見役の地位に立つ限り、そこまでに自己の感想を暴露ばくろしてしまうわけには行かないので、その母親に対したと同じような、その場かぎりの気安めをいって置くより仕様がなかった。

長吉は何処いずこも同じような貧しい本所ほんじよの街から街をばててく歩いた。近道を取つて一直線いまだに今戸いまどの家うちへ帰ろうと思ふのでもない。何処どこへか廻り道して遊んで帰ろうと考えるのでもない。長吉は全く絶望してしまつた。長吉は役者になりたい自分の主意を通すには、同情の深い小梅こうめの伯父さんに頼るより外ほかに道がない。伯父さんはきつと自分を助けてくれるに違ちがひないと予期していたが、その希望は全く自分を欺あざむいた。伯父は母親のように正面から烈はげしく反対を称となえはしなかつたけれど、聞いて極楽見て地獄たどえの譬たとえを引き、劇道げきどうの成功の困難、舞台の生活の苦痛、芸人社会の交際の煩瑣はんさな事などを長々と語つた後のち、母親の心をも推察してやるようにと、伯父の忠告を待たずともよく解わかつている事を述べつづけたのであつた。長吉は人間というものは年を取ると、若い時分に経験した若いものしか知らない煩悶はんもん不安をばけろりと忘れてしまつて、次の時代に生れて来る若いものの身の上を極めて無頓着むとんちやくに訓戒批評する事のできる便利な性質を持つているものだ、年を取つたも

のと若いものの間には到底一致されない懸隔のある事をつくづく感じた。

何処まで歩いて行つても道は狭くて土が黒く湿つていて、大方は路地のように行き止りかと危まれるほど曲つている。苔の生えた鱗葺きの屋根、腐つた土台、傾いた柱、汚れた板目、干してある檻樓や襦袢や、並べてある駄菓子や荒物など、陰鬱な小家は不規則に限りもなく引きつづいて、その間に時々驚くほど大きな門構の見えるのは尽く製造場であつた。瓦屋根の高く聳えているのは古寺であつた。古寺は大概荒れ果てて、破れた塀から裏手の乱塔場がすっかり見える。束になつて倒れた卒塔婆と共に青苔の斑点に蔽われた墓石は、岸という限界さえ崩れてしまった水溜りのような古池の中へ、幾個となくのめり込んでいる。無論新しい手向の花などは一つも見えない。古池には早くも昼中に蛙の音が聞えて、去年のままなる枯草は水にひたされて腐つてゐる。

長吉はふと近所の家の表札に中郷竹町と書いた町の名を読んだ。そして直様、この頃に愛読した為永春水の『梅曆』を思出した。ああ、薄命なあの恋人たちはこんな気味のわるい湿地の街に住んでいたのか。見れば物語の挿絵に似た竹垣の家もある。垣根の竹は枯れきつてその根元は虫に喰われて押せば倒れそうに思われる。潜門の板屋根には痩せた柳が辛くも若芽の緑をつけた枝を垂している。冬の昼過ぎ窈かに米八が

病氣の丹次郎をおとずれたのもかかる佗住居の戸口であつたらう。半次郎が雨の夜の怪談に始めてお糸の手を取つたのもやはりかかる家の一間であつたらう。長吉は何ともいえぬ恍惚と悲哀とを感じた。あの甘くして柔かく、忽ちにして冷淡な無頓着な運命の手に弄ばれたい、という止みがたい空想に駆られた。空想の翼のひろがるだけ、春の青空が以前よりも青く広く目に映じる。遠くの方から飴売の朝鮮笛が響き出した。笛の音は思いがけない処で、妙な節をつけて音調を低めるのが、言葉にいけない幽愁を催させる。

長吉は今まで胸に蟠つた伯父に対する不満を暫く忘れた。現実の苦悶を暫く忘れた……。

## 十

氣候が夏の末から秋に移って行く時と同じよう、春の末から夏の始めにかけては、折々大雨が降つづく。千束町から吉原田圃は珍しくもなく例年の通りに水が出た。本所も同じように所々に出水したそうで、蘿月はお豊の住む今戸の近辺はどうであつたかと、二、三日過ぎてから、所用の帰りの夕方に見舞に来て見ると、出水の方は

無事であつた代りに、それよりも、もつと意外な災難にびっくりしてしまつた。甥の長吉が釣台で、今しも本所の避病院に送られようという騒の最中である。母親のお豊は長吉が初裕の薄着をしたまま、千束町近辺の出水の混雑を見にと夕方から夜おそくまで、泥水の中を歩き廻つたために、その夜から風邪をひいて忽ち腸窒扶斯になつたのだという医者の説明をそのまま語つて、泣きながら釣台の後について行つた。途法にくれた蘿月はお豊の歸つて来るまで、否応なく留守番にと家の中に取り残されてしまつた。

家の中は区役所の出張員が硫黄の煙と石炭酸で消毒した後、まるで煤掃きか引越しの時のような狼藉に、丁度人氣のない寂しさを加えて、葬式の棺桶を送出した後と同じような心持である。世間を憚るようにまだ日の暮れぬ先から雨戸を閉めた戸外には、夜と共に突然強い風が吹き出したと見えて、家中の雨戸ががたがた鳴り出した。気候はいやに肌寒くなつて、折々勝手口の破障子から座敷の中まで吹き込んで来る風が、薄暗い釣ランプの火をば吹き消しそうに揺ると、その度々、黒い油煙がホヤを曇らして、乱雑に置き直された家具の影が、汚れた畳と腰張のはがれた壁の上に動く。何処か近くの家で百万遍の念仏を称え始める声が、ふと物哀れに耳についた。蘿月は唯一人で所在がない。退屈でもある。薄淋しい心持もする。こういう時には酒がなくてはなら

ぬと思つて、台所を探し廻つたが、女世帯の事とて酒盃一ツ見当らない。表の窓際まで立戻つて雨戸の一枚を少しばかり引き開けて往来を眺めたけれど、向側の軒燈には酒屋らしい記号のものは一ツも見えず、場末の街は宵ながらにもう大方は戸を閉めていて、陰気な百万遍の声がかえつてはつきり聞えるばかり。河の方から烈しく吹きつける風が屋根の上の電線をヒューヒュー鳴すのと、星の光の冴えて見えるのとで、風のある夜は突然冬が来たような寒い心持をさせた。

蘿月は仕方なしに雨戸を閉めて、再びぼんやり釣ランプの下に坐つて、続けざまに煙草を喫んでは柱時計の針の動くのを眺めた。時々鼠が恐しい響をたてて天井裏を走る。ふと蘿月は何かその辺に読む本でもないかと思いついて、箆笥の上や押入の中を彼方此方と覗いて見たが、書物といつては常磐津の稽古本に綴曆の古いもの位しか見当らないので、とうとう釣ランプを片手にさげて、長吉の部屋になつた二階まで上つて行つた。

机の上に書物は幾冊も重ねてある。杉板の本箱も置かれてある。蘿月は紙入の中にはさんだ老眼鏡を懐中から取り出して、先ず洋装の教科書をば物珍しく一冊々々ひろげて見ていたが、する中にばかりと畳の上に落ちたものがあるので、何かと取上げて見ると春着の芸者姿をしたお糸の写真であつた。そつと旧のように書物の間に収めて、なおもその

辺の一冊々々を何心もなく漁あさつて行くと、今度は思いがけない一通の手紙に行ゆき当あたった。手紙は書き終らずに止やめたものらしく、引き裂さいた巻まき紙がみと共に文句は杜とぎ切ぎれていたけれど、読み得るだけの文字で十分に全体の意味を解する事ができる。長吉は一度別ひとたぎれたお糸とは互たがひに異なるその境遇から日一日とその心までが遠とかつて行とつて、折角おきななじみの幼おきな馴染なじみも遂にはあかの他人に等しいものになるであろう。よし時々手紙の取りやりはして見ても感情の一致して行かない是非ぜひなさを、こまごまと恨うらんでいる。それにつけて、役者か芸人になりたいと思おもい定さだめたが、その望つひみも遂とに遂とげられず、空しく床屋とこやの吉きちさんの幸福を羨うらやみながら、毎日ぼんやりと目的のない時間を送おくっているつまらなさ、今は自殺する勇氣もないから病氣にでもなつて死ねばよいと書いてある。

蘿月は何というわけもなく、長吉が出水でみずの中を歩いて病氣になつたのは故意こいにした事であつて、全快する望のぞみはもう絶え果はてているような実に果敢はかない感かんじに打うたれた。自分は何故なぜあの時あのような心にもない意見をして長吉の望ぞみを妨さめたのかと後悔の念に迫せめられた。蘿月はもう一度思うともなく、女に迷つて親の家を追出された若い時分の事を回想した。そして自分はどうしても長吉の味方にならねばならぬ。長吉を役者にしてお糸と添つわしてやらねば、親代々の家うちを潰つぶしてこれまでに浮世の苦勞をしたかいがない。通人つうじんを以もて自じ

任する 松風庵 蘿月宗匠 の名に愧ると思つた。

鼠がまた突如に天井裏を走る。風はまだ吹き止まない。釣ランプの火は絶えず動揺く。蘿月は色の白い眼のぱっちりした面長の長吉と、円顔の口元に愛嬌のある眼尻の上つたお糸との、若い美しい二人の姿をば、人情本の作者が口絵の意匠でも考えるように、幾度か並べて心の中に描きだした。そして、どんな熱病に取付かれてもきつと死んでくられるな。長吉、安心しろ。乃公がついているんだぞと心に叫んだ。

明治四十二年八月―十月作



た写実的外面の芸術であると共にまたこの一篇は絶えず荒廢の美を追究せんとする作者の止みがたき主觀的傾向が、隅田川なる風景によつてその抒情詩的本能を外発さすべき象徴を搜めた理想的内面の芸術ともいい得よう。さればこの小説中に現わされた幾多の叙景は篇中の人物と同じく、否時としては人物より以上に重要な分子として取扱われている。それと共に篇中の人物は実在のモデルによつて活ける人間を描写したのではなくて、丁度アンリイ、ド、レニエエがかの『賢き一青年の休暇』に現したる人物と齊しく、隅田川の風景によつて偶然にもわが記憶の中に蘇り來つた遠い過去の人物の正に消え失せんとするその面影を捉えたに過ぎない。作者はその少年時代によく見馴れたこれら人物に対していかなる愛情と懐しきとを持つてゐるかは言うを俟たぬ。今年花また開くの好時節に際し都下の或新聞紙は 上の桜樹漸く枯死するもの多きを説く。ああ新しき時代は遂に全く破壊の事業を完成し得たのである。さらばやがてはまた幾年の後に及んで、いそがしき世は製造所の煙筒叢立つ都市の一隅に當つてかつては 時鳥鳴き蘆の葉ささやき白魚閃き桜花雪と散りたる美しき流のあつた事をも忘れ果ててしまう時、せめてはわが小さきこの著作をして、傷ましき時代が産みたる薄倅の詩人がいにしへの名所を弔う最後の中の最後の声たらしめよ。

大正二みづのとうし癸丑の年春三月小説『すみだ川』幸さいわいに第五版を發行すると聞きて

荷風小史

## すみだ川序

わたくしの友人佐藤春夫君を介して小山書店の主人はわたくしの旧著『すみだ川』の限定単行本を上梓じょうししたいことを告げられた。今日の出版界はむしろ新刊図書の過多なるに苦しんでいる。わたくしは今更二十四、五年前の拙作小説を復刻する必要があるや否やを知らない。しかしわたくしは小山書店の主人がわたくしの如き老朽文士の旧作を忘れずに記憶しておられたその好意については深く感謝しなければならぬ。依よつてその勧められるがままに旧版を校訂し併あわせて執筆当初の事情と旧版の種類とをここに識しるすことにした。

わたくしが初はじめて小説『すみだ川』に筆をつけたのは西洋から帰って丁度満一年を過すした時である。即ち明治四十二年の秋八月のはじめに稿を起おこし十月の末に書き終るが否や亡友いのうえあ井上唾唾君に校閲を乞い添てん刪さんをなした後のち草稿を雑誌『新小説』編輯者へんしゅうしゃの許もとに送った。当時『新小説』の編輯主任は後藤宙外氏ごとうちゆうがいであったかあるいは鈴木三重吉氏すずきみえきちであったか明あきらかに記憶していない。わたくしの草稿はその年十二月発行の『新小説』第十四年第十二巻のはじめに載せられた。わたくしはその時馬齒ばし三十二歳であった。本書に掲載した当時の

『新小説』 「すみだ川」の口絵は齋藤昌三氏の所蔵本を借りて写真版となしたものである。ここに齋藤氏の好意を謝す。

小説『すみだ川』に描写せられた人物及び市街の光景は明治三十五、六年の時代である。新橋上野浅草の間を往復していた鉄道馬車がそのまま電車に変わったところである。わたくしは丁度その頃に東京を去り六年ぶりに帰ってきた。東京市中の街路は到る処旧觀を失っていた。以前木造であった永代と両国との二橋は鉄のつり橋にかえられたのみならず橋の位置も変りまたその兩岸の街路も著しく変っていた。明治四十一、二年のころ隅田川に架せられた橋梁の中でむかしのままに木づくりの姿をとどめたものは新大橋と千住の大橋ばかりであった。わたくしは洋行以前二十四、五歳の頃に見歩いた東京の町々とその時代の生活とを言知れずなつかしく思返して、この心持を表すために一篇の小説をつくろうと思立った。この事はつぶさに旧版『すみだ川』第五版の序に述べてある。

旧版発行の次第は左の如くである。

明治四十四年三月朔山書店は『すみだ川』の外にその頃わたくしが『三田文学』に掲げた数篇の短篇小説及戯曲を集め一卷となして刊行した。当時朔山書店は祝橋向の

河岸かしのり通つぎから築地しずかの電車通へ出ようとする静な横町よこちょうの南側（築地二丁目十五番地）にあつて専ら俳諧もっぱはいかいの書巻を刊行していたのであるが拙著『すみだ川』の出版を手初めに以後六、七年の間盛さかんに小説及び文芸の書類を刊行した。書店の主人みずからもまた短篇小説集『遅日』を著あらかわした。谷崎たにざき君の名著『刺青』が始めて単行本となつて世に公おおやけにせられたのも靱山書店からであつた。森鷗外もりおうがい先生が『スバル』その他の雑誌に寄せられた名著の大半もまた靱山書店から刊行せられた。

大正五年四月靱山書店は旧版『すみだ川』を改刻しこれを縮刷本しゆくさつほん『荷風叢書』の第五巻となし装幀そうていの意匠を橋口五葉氏はしくちごように依頼した。

大正九年五月春陽堂しゆんようどうが『荷風全集』第四巻を編輯刊行する時『すみだ川』を巻頭に掲げた。この際わたくしは旧著の辞句を訂正した。

大正十年三月春陽堂が拙作小説『歓楽』かんらくを巻首に置きこれを表題にして単行本を出した時再び『すみだ川』をその中に加えた。

昭和二年九月改造社かいぞうしゃが『現代日本文学全集』を編輯した時その第二十二編の中に『すみだ川』を採録した。

昭和二年七月春陽堂の編輯した『明治大正文学全集』第三十一編にも『すみだ川』が載

せられている。

昭和三年二月木村富子きむらとみこ女史が拙著『すみだ川』を潤色じゆんしよくして戯曲となしこれを本郷ほんごう座ざの舞台のぼに上した。その時重なる人物ふんに扮した俳優は市川寿美蔵いちかわすみぞう市川松蔦いちかわしやうちよう大谷おおた友右衛門ともえもん市川紅若いちかわこうじやくその他である。木村女史の戯曲『すみだ川』はその著『銀扇集ぎんせんしゅう』に収められている。

昭和十年十月麻布あさぶの廬いにおいて

荷風散人識さんじんしるす



## 青空文庫情報

底本：「すみだ川・新橋夜話 他一篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2005（平成17）年11月25日第23刷発行

底本の親本：「荷風小説 三」岩波書店

1986（昭和61）年7月発行

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2009年12月20日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# すみだ川

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>